

2024年7月21日（日）主日朝礼拝説教

『七回祈れ』井上隆晶牧師

列王記上 18 章 30～40 節、ヤコブの手紙 5 章 7～8、13～18 節

①【聖霊の火が降ると、人に信仰が戻る】

三年間の干ばつと飢饉の後、主の言葉がエリヤに臨みました。「行って、アハブの前に姿を現わせ。私はこの地の面に雨を降らせる。」（列王記上 18 : 1）そこでエリヤはこの言葉に従い、アハブ王の前に姿を現しました。エリヤはアハブに、カルメル山頂にイスラエルの人々と、450 人のバアルの預言者と 400 人のアシェラの預言者を集めてほしいと提案します。バアルとは手に雷を持つ男の神です。アシェラとは女神です。天からの雨が大地に染み込んで作物は育ちますから、農耕民族はこのバアルとアシェラの両方を拝んだのです。ちなみにこのアシェラがインドに伝わり、インドから日本に伝わり、奈良の興福寺に「阿修羅像」という国宝の彫像がありますが、この「阿修羅」になったという説もあります。エリヤは集まったイスラエルの民に「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」（同 21 節）といます。神様は二人の主人に仕えることを嫌がられます。（マタイ 6 : 24）二人に仕えるという事は、結局は自分の利益になる方を選ぶということです。自分の利益にならなかつたら捨てるということで、神を利用することです。自分がそのように扱われ、利用されたら嫌でしょう。しかし民は何も答えません。そこでエリヤはバアルの預言者たちと、互いに一頭の雄牛を裂いて祭壇の薪の上に置き、お互いの神の名を呼んで、火をもって答える神こそ神としようではないかと、提案します。最初にバアルの預言者たちが、朝から昼過ぎまで体を傷つけ、血を流し、叫びながら狂ったように彼らの神の名を呼びますが何も起こりません。次はエリヤの番です。彼は 12 部族をかたどって 12 の石を選んで崩れた祭壇を修復します。祭壇の周りに深い溝を掘り、薪の上に切り裂いた雄牛を乗せ、その上から三回水を注ぎました。そして「アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられることが…明らかにになりますように。私に答えて下さい。主よ、私に答えて下さい。そうすればこの民は、あなたが神であり、彼らの心を元に返したのは、あなたであることを知るでしょう。」（同 36～37 節）と祈りました。すると、天から主の火が降って、献げ物と薪、石を焼き、溝にあった水をなめ尽くしました。これを見た民はひれ伏し「主こそ、神です。主こそ、神です。」と告白し、神に立ち返りました。昔、エリヤの祈りに神は火をもって答えられましたが、イエス様の祈りに、神は聖霊という火をもって答えて下さいました。天の火が降って、イスラエルの民に信仰が戻ったように、聖霊の火が降って、使徒たちに信仰が生まれました。エリヤの時に犠牲となったのは雄牛でしたが、私たちの為に犠牲になったのはイエス様でした。人が信仰を持ち、神に帰るためには、聖霊という火が必要なのです。

●先日、列王記上 22 章を読んでいたら面白い場面が出てきました。神の前に天使たちが集まると、神は「アハブを唆し、殺させる者は誰か」と言うと、「ある霊が進み出て『わたしが彼を唆します』」（同 22 : 21）と申し出たというのです。その霊は、預言者たちに偽りの霊を送り、偽りを預言させたというのです。カルト宗教というのは、確かに偽りの霊（悪霊）の働きによるものです。「神はこう言われた」と嘘を預言し、偽りのメシアを信じさせるからです。しかし、聖霊が働いた時、一瞬にしてその人はキリスト教の信仰を持ちました。Mさんは統一協会の間違いに気づいた時、「風が吹き、統一協会の教えと文鮮明を吹き飛ばし、後にイエス様だけが残っていた」と言われました。これが聖霊です。聖霊が来る時、人は正しい信仰に戻ります。

②【壊れた祭壇を修復する】

聖霊という火を呼ぶために、まずエリヤは壊れた祭壇を修復する必要がありました。祭壇が壊れているという事は、主なる神に献げ物がなされておらず、神との交わりが絶え、祈りも絶えていたということになります。壊れた祭壇を修復することは、礼拝を修復することです。信仰の回復は、礼拝の回復であり、祈りの生活の回復なのです。

●E・M・バウンズは「祈禱の失敗は生活の失敗である」と言っています。祈りの生活、礼拝の生活が崩れると、人生も崩れるということです。これは嘘ではありません。私は信徒の時から、なかなか祈りをすることができませんでした。今でもそうです。榎本保郎牧師が「朝の5分があなたを変える」という言葉に影響され、早天祈禱会を始めましたが、私もそれを真似しましたが続きませんでした。一人で聖書を読んでいると眠くなるのです。そこで集会にしていれば良いと思い、時間と曜日を決めました。家ではなかなか集中できませんが、教会では人の目があるので集中できるのです。また自由祈禱をしても、すぐに終わってしまい、祈りが続かないので「祈禱書」で祈ることを学びました。古代教会の祈禱は、読むだけで3時間かかるのです。祈禱書は非常に良くできていて、心の弱い者にはコルセットのようなものであり、信仰を鍛えてくれます。祈りの時に香を炊くことも楽しみです。体で自分がいる場所が聖なる場であることを知るからです。こうしてありとあらゆる方法を使い、肉体を釘づけ、私は祈りの祭壇を築き直してきました。基本は祈りの生活だと思えます。これが崩れれば、聖霊は降らず、聖霊が来なければ力が出ず、宣教にも行けないのです。

エリヤは「この民は、あなたが神であることを知るでしょう。」（同 18 : 37）と祈りました。奇跡が現れる意味は、それを通して神を知り、悔い改めて神に立ち返るためです。そうでなければ、単なるマジックショーになってしまうでしょう。病気の癒しもそうです。病気が癒されてますます主のために働くためです。ペトロの姑など熱が下がったらすぐにイエス様一行をもてなしました。健康になって

ますます悪い事を行うなら、病気でいた方が良いでしょう。大事なことは病気であっても、健康であっても私たちの人生は、神に仕え、神を証しする事にあります。

③【忍耐して祈ろう】

エリヤはアハブに「激しい雨の音が聞こえる」と言いましたが、まだ雨が降る気配はありませんでした。エリヤはカルメル山頂に上って行き、地にうずくまり、膝の間に頭をうずめて祈りました。彼はしもべに「上って来て、海の方をよく見なさい。」(同 18 : 43) というと、しもべは上って来て「何もありません」と答えます。エリヤは「もう一度」と命じ、それが七度繰り返したといひます。七というのは完全数ですから、満ちる時があるということでしょう。七度目にしもべは「手のひらほどの小さい雲が海のかなたから上ってきます。」(同 18 : 44) と報告すると、空はやがて厚い雲に覆われて暗くなり、風が出て来て、激しい雨になりました。

天からの火はすぐに降りましたが、天からの雨はすぐに降ることはありませんでした。これはある真理を教えています。キリストと聖霊による救いは天からすぐに与えられましたが、それを自分のものにし、実を結ぶためには忍耐と時間が必要であることを教えているのです。こうして祈って待つ間に、私たちの野心や、自己中心な思いを取り除き、神のみ心にかなうものに変えていただくのです。「小さな雲」という言葉の中にも、何か大きな奇跡を期待する私たちへの戒めが秘められているように感じます。

キリスト教信者にとって祈る時に必要なことが二つあります。「神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神はご自分を求める者たちに報いて下さる方であることを、信じていなければならないからです。」(ヘブライ 11 : 6) という言葉です。

●佐藤雅文という人が『祈祷の生涯』という本を書いており、そこにこんなことが書かれています。「どんな事件であっても、事件がただ事件としてある間はまことに困難である。しかし、これが神の手に委託された場合には、すでに困難はその困難であるべき素質を失っているのである。…われわれは困難を恐れない。なぜならば、すべてのことを良きになしたもう神の摂理を信じているからである。祈って平安になり、かつ祈っては平安になり、このようにして、神のしもべとしての生涯の価値を発揮していくべきである。」

高齢者施設の厨房では、よく職員が辞めてしまいます。施設長はいつも人を集めることで頭を痛めていました。でも委託業社に任せたら、そこが人事を管理するので人の心配はなくなったのです。それと同じです。神にある問題を祈って委託したら、神が介入し働いて下さるのです。

まず祈りの祭壇を築き直し、神を信頼しきってその名を呼び続けましょう。必ず願いがきかれる「時」があります。「時」は既に決まっています。その「時」まで祈りをやめてはいけません。そうやって約束の実現を確かに見る者にさせていただきますように。